



統合失調症を患う母とともに生きる子ども

～ゆりの日常～

夏の空色 —15歳—



松岡園子

青、あちこち青色。

震災後に街を見渡すと、まだ手付かずの建物もある中で日に日に増えていったのは、屋根にかけられたブルーシートだった。くっきりとした青さがゆりには痛々しく感じられる。

大きな地震が神戸を襲い、2カ月ほど経った。ショベルカーで瓦礫の集められる音やヘリコプターのプロペラ音は、日常の一部になった。復興に向けて動き出す気配が、神戸の街にあふれる音を創っている。でも、あの日から時計が止まってしまったままの人だたくさんいる。蛇口をひねれば水が出るのが当たり前だった中学2年生のゆりは、震災以後、これからの毎日を何ごともなく過ごせるかどうかなんて、誰にもわからないと感じるようになった。この世界には守りたくても、守りきれないものがある。でも、守りたいと思って行動しなければ、簡単に失われてしまうものもある。自分は何を守りたいんだろう。

ゆりが小学校6年生を終える春休みに祖母が入院し、その頃から母・夏子が誰もいない部屋で独り言を話すようになった。独り言は次第に増え、話しかけてもつじつまの合わない返事が返ってくるばかりになった。夏子と2人暮らしのゆりを心配した伯父と伯母は、ゆりと夏子を奈良へ引き取った。

祖母が亡くなった途端、ゆりは児童養護施設に入所することが決まっていた。児童養護施設で暮らすことに納得のできなかったゆりは、児童養護施設から何度か抜け出した。その後の話し合いの末、ゆりと夏子はゆりの希望通り、元の神戸の家へ戻って暮らすことになった。

家事のできない夏子との生活は、何もかも自分でしなければならなかった。それに、まともな会話ができず、理解のできない言動をする夏子と一緒に暮らすということは、使ったことのない神経を使い、気力を消耗させた。でも、ゆりはそれでも夏子と一緒に暮らしたいという思いの方が強かった。

そうした夏子と2人の生活も、友達や近所の人達に支えられて成り立っていた。夏子と暮らし、驚くようなこと、腹の立つこと、嬉しいことが次々と起こったが、ゆりは1人でど

うにかしてきたのではなく、いつも誰かがそばで見守ってくれているような気がしていた。

そうして1年半が経とうとする時、阪神淡路大震災が起きた。祖父の遺してくれたゆりの家は被害が少なかったものの、あの日を境に変わってしまった街や、神戸の人々を見つめながら2カ月を過ごした。

「あと一年かぁ……」

学校からの帰り道、ぼんやりと空を見てゆりは言った。

「うん？ 卒業まで？ あっ、ひこうき雲」

林さんは、太く広がるひこうき雲を見上げた。

4月から中学三年生になる。今の生活は、あとどれくらい続くのだろうと考えることがある。いくら家事をして、夏子のしんどさに付き合っても、ゆりが中学生である限り、周りの大人は自分を子ども扱いする。

空を見上げていた林さんは、くるりとゆりの方に向き直った。

「ゆりちゃんはどうするん？ 進路」

「うーん……林さんは？」

「私は、私立1本でいくかな……」

林さんは少しうつむきながら、長いポニーテールの髪を揺らした。

「私立？」

「母さんが、その方が保育関係の授業もあるし保育の仕事に就きやすいやん、って。ゆりちゃんは？」

ゆりには私立と公立の違いがよくわからなかった。

「私は……」

どうしようかな。この先のことなんて、考えたことがなかった。将来、保育関係の仕事をしたという話は、林さんから1年前に聞いた。その時から変わらずに目標を持ち続けている林さんが、急に大人っぽく見えた。

ゆりは、今の自分にできることを考えてみた。学校の成績はよくない。最近のテストの点は、さらにひどい。そんな自分は、どうやってこの先の進路を決めていけばよいのかわからない。たとえ決めても、それで合っているのかななんてわからない。ゆりは、大きな海の真ん中に1人で浮いているような気がした。

おうちの人とよく相談してください。先生はそう言うけれど……

ゆりの見上げた空には、薄い灰色の雲が広げた綿のように浮かんでいた。

家のドアを開けると、奥の部屋から歌声が聞こえてきた。

ねーんねん、ころーりーよ、おこーろーりーよ

最近、夏子はうつむいて静かに歌う。それを見ていると、ゆりはやりきれない思いでいっぱいになる。家で英語教室を開いていた頃の夏子は、力強く毎日を突き進んでいるように見えた。玄関でしばらく立っていたゆりは靴を脱ぎ、すぐ一番手前にある「教室」に入った。

ゆりが3歳になった頃から、夏子はこの教室で英語教室を開いていた。ここにはたくさんのお兄ちゃん、お姉ちゃんが入り出していた。ゆりが小学1年生になった頃には一緒に英語クラスへ入れてもらった。絵カードや手作りのパペット、英語音声の出る機械を使い次々と進んでいく授業は、おもちゃ箱の中にあるようだった。

How is the weather today?

—It's sunny.

毎回クラスの初めに英語で交わす挨拶も、何度かやりとりするうちに覚えた。晴れの日、曇りの日、雨の日、その日の天気に合わせて絵カードがホワイトボードに貼られていた。英語を習いに来ている子どもたちのために、何百回と空を見て、夏子がカードを変えていたのだった。

今、ゆりがホワイトボードの隅を見ると、雨降りの絵カードが貼られたままになっている。ゆりは、"rainy" とつぶやいた。今のがらんとした教室は、あの頃と同じ教室なんだろうか。動きでいっぱいだった教室なのに、時が止まってしまっているようだった。関心を持たれなくなったカードの雨粒の絵が、涙のように見えた。

ずっと家にいて寝ていたり、歌を歌っているだけの夏子は、果たして幸せなんだろうか。ゆりは、自分にはまだ「幸せ」が何なのかはわからないと思った。でも、嬉しいと感じた時に笑顔になったり、楽しいと感じることをしている時に気持ちが満たされることがある。今の夏子にはそれがあるだろうか……？

隣の家に面している窓の隙間から、甘辛い匂いが漂ってきた。あ、この匂い。

「もうこんな時間。お母ちゃん、今日は晩ご飯、何にしよ？」

この辺りでは3月の初めごろになると、明石の漁港で水揚げされたいかなごを買ってきてくぎ煮にする家が多い。祖母が亡くなるまではゆりも、いかなごを親せきや祖母の友人宅へ送るのを手伝っていた。醤油と砂糖で水分がなくなるまでゆっくりと炊かれていく甘辛い匂いは、ご飯が食べたくなるほど濃い。同じような匂いはこの時期、町のあちこちからしてくる。でも今年は1月に震災があったからか、それに気づくのは今日が初めてのような気がした。手間暇をかけて、何かを作ることができるということと、その家に余裕のある空気が流れているということは、同じことなのだとゆりは感じた。

「カレーでいいかな」

「うん」

レトルトものが楽で、そればかりになってしまう。毎日することがたくさんあって、1食1食を済ませていくことだけでも精いっぱいになる。どんな食事でもこれまで夏子に文句を言われたり拒否をされたことはない。だけど、夏子からは食べ物への興味が全く伝わってこない。夏子の食べているどの食べ物も、全く同じものなのではないかを感じるほどだ。自分だったら……とゆりは考えてみる。甘いケーキやプリンをご褒美に食べたり、皆が集まった時にお寿司が出てきたりすれば、嬉しくなる。でもお母ちゃんは、そんなこと感じたりしないのかな。

1 学期がまた始まった。強い風が校門の桜の花びらを勢いよく散らせる。

春休みが明けて最高学年になったからか、スカート長さやカバンの紐をより短くして、以前の 3 年生だけが許されていた格好に様変わりしている女子が数名いた。その子たちは大人っぽく、あか抜けて見えた。

「やっぱり、同じクラスになれんかったあ」

クラス発表の場で、最後のチャンスやったのに、と言ってわざと子どもっぽくふくれる林さんを見てゆりは吹き出した。教室に入ると、担任になった先生が教卓の前で立っていた。また男の先生やあ、とゆりは少し残念になった。

どちらかという、夏子のことを話しやすいのは女性の先生だ。生まれてすぐにお父さんがいなかったからか、父親と同年代ぐらいの男性にあれもこれも相談するということが、どうもピンとこない。

「このクラスの担任になった山川です。男子体育の担任でもあるので、よろしくな。今年は皆と中学最後の思い出をたくさん作ろうと思っています。6 月には修学旅行もあるしな」

そうやった、とゆりは思った。

3 年生の 6 月には 2 泊 3 日の修学旅行があると聞いていた。3 日間も夏子を 1 人で家に置いて行っても大丈夫なんだろうか。今、修学旅行に行きたいとはあまり思わない。それでも修学旅行に行く方がよいのだろうか。ゆりは皆に配られた、『中学 3 年生・生活ノート』の 4 月 8 日の欄に、「家の事情で、修学旅行に行くことができません」と書いて提出した。

翌日、返ってきたノートには「先生としては、皆で一緒に行きたいですが。今日の放課後、少し時間をください」と書かれていた。

放課後ゆりは、おそろおそろ山川先生のいる職員室の机へ向かった。

「先生、修学旅行のことで来ました」

「おお、吉田さん、あれはどういうこと？」

「お母さんが病気がちで。3 日も家を空けると心配なんです。家族はお母さんしかいないので、心配で……」

理解してもらえるのだろうか。それでも皆と足並みをそろえないといけないのだろうか。伏し目がちだったゆりは、思い切って視線を山川先生の方へ向けた。先生の顔からは、昨日の自己紹介や、ホームルームで冗談を言って皆を笑わせていた時の笑顔は消えていた。ゆりも先生も黙り込んでしまった。

「先生としては、一緒に行きたいところやけどな。中学の思い出になるし、中学校の修学旅行は、1 回しかないよ。親戚の人とかに相談してみたりできない？」

また親戚か、とゆりは思った。親戚にはもうお世話になりたくない。生返事だけしてゆりは職員室を出た。中学最後の思い出を、クラスの誰一人欠けない状態で残したい気持ちはよくわかる。でも、それがそんなに大切なことなんだろうか。中学最後の思い出、3 年生最後

の思い出、そうして区切りをつけたい人もいる。そうして皆で盛り上がっていくことが大事だという考えもある。でもゆりはどうしても、そうした考えからはどこか 1 歩引いたところに自分がいるように感じていた。そんな冷めた自分ひとつの考えを、誰にも言ってはいけないような気がした。

結局、修学旅行へは行かないことにした。

「なんで行かんの？」

タイミングを見計らって話したつもりだったが、ゆりはそのたびに、話した友達から同じような質問を受け、同じような説明をした。

「お母ちゃんが病気がちやし……3 日間、家を空けると心配やねん」

「そうなんや。なんか、ゆりちゃん……かわいそう」

「そんなことないよ。しょうがないし」

ゆりは大げさに笑い、顔の前で大きく手を振った。話した相手が暗い表情になるのを見たくはない。でも、クラスの子たちの反応はだいたい同じだった。

自分はかわいそうなんだろうか。

中学 3 年生の子は、同じ学校の人たちと修学旅行に行きたいもので、行けない人はかわいそうなんだろうか。少なくともゆりは、自分はそうではないと思った。旅行なら自分がもっと成長してから、行きたいところへ行けばいい。ただ、今は行けない。行きたいと思わない。

皆が修学旅行へ行っている 3 日間、ゆりの他には 3 年生のいない中学校へ通った。旅行から帰ってきたクラスの子たちは、ゆりのためにお土産を買ってきてくれた。ゆりはそれで十分だと思った。修学旅行の話題にはついていくことができなかったが、自分の守りたいものを自分の手で守っていくことについて、少しわかりかけたような気がした。

空の青色が濃くなったかと思うと、あっという間に夏休みになった。空にはくっきりと入道雲がそびえている。それはお城みたいに見えた。夕方には、薄くなった水色の空にピンク色やオレンジ色のグラデーションが広がる。いつからかわからないけれど、夜でも蟬の鳴き声が外で響くようになっていた。

夏の空は明るくなったり、曇ったり。時に、はっと目を見張るほど美しい色を出す。ゆりにはそれが、夏子の姿と似ているような気がした。西の方角から灰色の雲が押し寄せてきているように感じた。向かい風が髪をかきあげる。

「夕立がくるぞお」

6,70 代ぐらいの男性が、被っていた麦わら帽子を脱ぎながら道を横切った。その男性の言う通り、ゆりが家に着くのと同時くらいに、空から地面へと雷の音が響いた。

「ほんまや、さっきのおじいちゃんすごい……」

年配の人の言葉は、長い年月をかけた経験から発せられる言葉なんだろう。気まぐれに任

せてものを言っているようには聞こえない。

雨が強く降りだした。夜には林さんが来るのに、大丈夫かな。

ゆりの心配をよそに、激しく地面を濡らした雨雲は30分ほどするとまたどこかへ行ってしまった。

「夏休みにゆりちゃん家に泊まりに来るの、恒例になったなあ。花火買ってきたよ」

7時頃にやって来た林さんはそう言って、持っていたスーパーの袋から手持ち花火のパッケージを見せた。林さんはお風呂から上がってすぐに家を出てきたんだらうか。下ろした長い毛先がTシャツの背中を濡らしている。

「わあ、花火やあ。ありがと」

「母さんってほんまに心配性やわ。花火、絶対にバケツに水貯めて持って行きよって。もう中3やねんから、わかってるって言ってんのに。いろいろうるさいわあ」

林さんは、歯を見せて静かに笑った。お母ちゃんはそういう心配ってするのか。夏子から細かい指示をされることのないゆりは、林さんを少しうらやましいと思った。昼間は息をするだけでも熱風が体を抜けていったのに、夜になると真夏とは思えないほど空気がからっとしている。ゆりは目を閉じて頬に風が当たるのを感じた。

ゆりは線香花火を最後に残した。濃いピンク色の持ち手をつまみながら、小さく震える明るい玉から消えそうなほど細い光が点いては消えるのを静かに見守った。

9月になると、進路のことで周りが慌ただしくなってきたように感じた。三者懇談に夏子が来てくれた。ゆりと夏子が教室の前に着くと、教室前の引き戸は開けられていた。山川先生の日焼けした茶色い顔がこちらを向く。前の番の人はもう終わって帰ったみたいだ。

「あ、どうぞ」

ゆりと夏子が並べて置かれた椅子に腰かけると、山川先生が「進路希望調査票」と書かれた紙に目を落としながら言った。1学期が終わるころに夏子と相談して書いたものだ。

「……吉田さんは、就職希望でいいんですね？ 働きながら定時制高校に行くこともできますよ。考えてみませんか？」

山川先生は、背表紙に『定時制高校』と書かれた薄いファイルを開き、説明をし始めた。

「定時制は、夕方から始まる高校です。仕事をしながらでも行くことができるし、色々な年齢の人が通っています。皆、事情があつて定時制高校で勉強をするために来ています。卒業すると高卒の資格を得ることができますよ」

それいいな、とゆりは思った。

「先生、その高校のこと、詳しく知りたいです」

ゆりは、夏子に視線を送った。夏子は山川先生の手もとを見た後、うろうろさせた視線を先生に向けて訊いた。

「あの、ゆりの成績では、昼間ならだいたいどこの高校に行けますか？」

「あ、吉田さんはですね……公立なら、東高校あたりでしょうか」

「ゆり、昼間の高校を受けないの？」

夏子の目があまりにまっすぐで、ゆりは慌てた。ゆりは山川先生の手もとにあるパンフレットの写真を見つめながら答えた。

「……働きながら定時制高校に行きたい。昼でも夜でも高校は同じじゃないの？」

山川先生の手の中で、夜の校舎だと思われる写真が顔をのぞかせた。濃紺の空に校舎の窓からもれる光が浮かび上がり、その窓の1つひとつが金色に光っているように見えた。

「定時制高校や昼間の高校のこと、就職のこと、いろんな進路があるから。併せて考えてみてもいいんじゃないか」

ほとんどの人が当たり前のように昼間の高校を選ぶ。夜の高校ってどういうところなんだろう。皆とは違うことを選ぶのは、勇気がいることだと思う。

翌週の放課後、職員室に呼ばれたゆりは先生から中卒求人一覧の冊子を受け取った。

「ここにあるのは、中卒で正社員を採用している会社や。この中でいいと思ったところがあったら、言ってくれ。震災の影響で去年までよりは少ないって聞いているけど……」

ゆりが表紙を開くと、小さな文字の書かれた表が目に飛び込んできた。これまでに聞いたことのない社名ばかりだ。仕事の内容、場所、給与、休日と項目ごとに詳しく書かれている。目で2、4、6……と数えると、全部で20ほどあった。中には仕事をする場所が神戸以外の住所地になっているものもある。ゆりは1つひとつに目を通していった。

——靴の製造補助。神戸には、靴やその材料となる皮を加工する工場が多くあるという話を聞いたことがある。ゆりは、自分が靴を作っているところを想像してみようとしたが、その姿が思い浮かばない。頭の中に浮かぶのは絵本で読んだことのあるような、靴のパーツをハンマーで叩いているような姿だった。製造補助ということは、靴の材料を組み立てていくということなのかな。工場の機械を使うのか、それとも手作りしていくのだろうか。

——調理補助。給食弁当の会社が二件ほどあった。給食やお弁当の調理かあ。祖母と一緒にコロケやハンバーグを作った時の香ばしい香りがしてくるような気がした。

一番多かったのは、美容師見習いの求人だった。美容師さんは、中学を卒業したらすぐに見習いになることができるのか。他にも、県外で住み込みをしながらする仕事もあった。

冊子を持ち帰ったゆりは、夏子の横でそれを広げていた。

「お母ちゃん、どこにしようかなあ」

「……ゆり、本当にいいの？」

ゆりの腕にぬくもりが伝わった。冊子を横からのぞき込む夏子の腕が触れている。

「え、何が？ 私、早く働きたいよ」

「昼間の高校に行ってもいいんよ」

ゆりは、そのままの姿勢で続けた。

「でも私、仕事、やってみたい」

夏子が働けないままでは、貯金が減るばかりだ。それなのに、その貯金の一部をゆりが遊びに使ってしまったこともあった。そうして減った分の埋め合わせを、早くしたいと考えて

て

いたこともある。それに何より、自分の力で仕事をしてみたい。

ゆりは冊子の表を眺めた。こんなにもたくさんの職場が仕事を用意してくれているというのに、心の底からはしゃぎ出したい気分になった。早く働きたい。そして自分の力で生きていることを少しでも感じたい。住む場所を他の人に決められたり、誰かに頼りっぱなしだった自分を、少しでも向こうに遠ざけてしまいたい。

仕事ってどんなだろう。自分でお金を稼ぐってどういうことなのかな。

ゆりは冊子を台所のテーブルに置いて、毎日眺めた。

「就職希望者は今日の放課後、3組に集合して説明を聞くように」

帰りのホームルームで、担任の山川先生が言った。就職希望っていても、このクラスにはゆりしかいない。放課後、ゆりが3組のドアを開けると、4組の鶴谷さんと六組の島さん、学年主任の水島先生の顔がこちらを向いた。

あ、私だけじゃなかったんや。

鶴谷さんの髪は茶色を通り越して、毛先が金色に近い。見た目で判断してはいけないと思うけれど、髪の色のも明るさと制服のスカートが地面につきそうなほど長いのが目に入ると、反射的に怖いと感じて後ずさりしてしまう。ゆりはドアを閉め、1歩ずつ前に進んだ。

鶴谷さんの横にいる島さんが、ゆりに声をかけた。

「吉田さんも就職？　ここ、空いとおで」

島さんがセミロングの茶色い髪をかき上げながら、隣の席を指さした。島さんが話しかけてきてくれて、また深く息ができるようになった気がした。静かに荷物を下ろし、椅子に腰かけた。島さんの姿は、鶴谷さんとそう変わらない。でも人懐っこさがあるためか、話しやすい。ゆりは鶴谷さんの方にも視線を投げかけた。もし目が合えば微笑むつもりでいたが、そうはならなかった。

鶴谷さんの眉は細く整えられていて、目がくりっと大きい。まつ毛が濃く見えるのは、マスカラを塗っているのだろう。あごがシャープで、リカちゃん人形みたい。

「えー、じゃあ就職する人、面接の時に気をつけることを説明します」

水島先生が、プリントを配りだした。

先生の説明によると、就職の前に希望の会社へ行って面接を受けるのだそうだ。先生は10分ほどの説明の中で「社会人」という言葉を5回も使った。

ゆりも「社会人」という言葉を心の中で繰り返してみた。

「島さんたちはどこを受けるか、もう決めてる？」

水島先生の説明がひと通り終わると、ゆりは島さんの向こうに座っている鶴谷さんにも視線を向けて訊ねてみた。

「私と鶴ちゃんは、美容師見習い。どこにするかは、まだこれから」

島さんは、「なっ」と鶴谷さんにも同意を求めるような仕草をしながら答えた。机の上に頬杖をついていた鶴谷さんの目が、一瞬だけゆりの方を見た。

「そうなんや。美容師さんかぁ。私もまだ……。製造にするか、調理の補助かなぁ」

いつもヘアスタイルや制服の細かいところまで手入れをしている 2 人が、見習いとしてお客さんの髪を洗ったり、乾かしたりしているところが目に浮かんだ。きっと、素敵な美容師さんになるんだろうな。自分なら、おしゃれに興味のある人に髪型や服装についてのアドバイスをしてもらいたいと思う。美容師へ続く道のスタートラインは、2 人のすぐ目の前までできているように見えた。ゆりは自分が興味のあること、関心のあることを仕事にするのがいいのかもしれないと思った。

「11 月の初めには、希望の就職先を出してくれ。おうちの人も相談して決めてくれよ」

先生の声は広い教室に響く。ゆりの心の針は「社会人」になることに少しずつ振れだした。チョウがさなぎから脱皮をしていくように、自分も脱皮をしていくのだろうか。今、中学生の自分は「勉強しなさい」と言われることが圧倒的に多い。でも、4 月になれば求められることが仕事に変わってくるんだろう。いや、もしかしたら、もうすでに変わり始めているのかもしれない。

高校生になれば、高校生としての勉強だってもちろん必要なはずだ。でも、任されたことを覚えていくのが仕事をする上で大切なことだと、目の前で先生が話している。ゆりは、今の自分の手足が、全く違う人のもののように感じられてきた。自分が遠くへ行こうと思えば、どこにだって行けるのかもしれない

11 月に入り、クラスでは前にも増して受験勉強の話題が増えてきた。帰りの挨拶が終わると、ゆりはすぐに先生のいる教卓へ向かった。

「先生、第 1 希望、ここの給食会社にします」

ゆりはひとつの社名が赤マーカーで大きく囲まれたリストを先生に見せた。ゆりにはそこだけが大きく浮き上がって見えた。

「そうか、じゃ、ここに応募するねんな。お母さんも、それに賛成してるねんな」

「はい」

一瞬、夏子に「昼間の高校に行かなくていいの？」と訊かれた時のことが思い浮かんだ。昼間の高校に行くと楽しいのかな。近所でも 2、3 歳年上のお姉ちゃんが高校生になり、制服姿で友達と連れ立って歩いているのをよく見かける。その姿は中学生とはまた違い、より自由で輝いているように見える。制服姿もかわいい。ゆりには昼間の高校へ行くことと、働いて定時制高校に通うことの違いがよくわからない。でも、仕事をして夜に高校へ通っていたら、もう頻繁に友達と遊んだりできないのは確かだ。

「今日ね、区役所に行ったら、こんなところがあるって」

ゆりが家に帰ると夏子が区役所へ行ったと言って、持ち帰ってきた書類を広げた。その中にカラー刷りのパンフレットが 1 枚あった。そこには「にこにこ作業所」という文字と、その作業所のものと思われる写真が載っていた。写真の中にエプロン姿で調理をしている

と思われる人が5人ほど写っている。材料を切っている人、焼いている人、盛り付けをしている人。皆で楽しそうに調理をしているというよりは、それぞれが自分の仕事を一生懸命にしているように見える。

「ここに行ってみようかと思うのよ」

「え」

「もう行くって言ったから」

……そうなんや。作業所、どんなところなのかなあ。

「どこにあるん？」

「駅前の薬局の横」

「んじゃあ、近いね。そこに、誰かお世話係の人がいてくれるの？」

「指導員さんって言ってたかな」

じゃあ、大丈夫か。いつも横になってばかりいた夏子がどこかに通いたって言うことだけでも珍しい。ゆりは自分が学校へ行っている間、夏子の行く場所があることに、1人で抱えていた荷物を、誰かと分け合っていけるような気がした。

12月に入ると、夏子はにこにこ作業所へ通い始めた。通いだして2週間ほど経ったころ、ゆりが家に帰ると台所からお肉が焼けるようなにおいがしてきた。

え。

以前、夏子が牛乳を温めようとして火にかけたまま、ミルクパンを真っ黒に焦がしてしまったことが思い出された。ゆりはあわてて靴を脱ぎ、台所の引き戸を開けた。

「おかえりい」

コンロのほうに向かい、背を向けていた夏子が振り返った。ゆりはまず、コンロにかけられたフライパン上に何があるのかと、目を見張った。そこには、半分に切ったピーマンの中にお肉をのせたものが8つほど焼かれているように見えた。テーブルの上には、料理の本が開かれている。

「ちょっと作ってみようと思って」

夏子はそう言って、本のページへ視線を落とした。

焦げてはいないし、大丈夫か。ピーマンの中のお肉は、ギュッとまとめられたひき肉のようだった。開かれたページには、『ピーマンの肉詰め』と書かれている。本の写真の通り、フライパンの上でしんなりとしたピーマンが、ジュージュウと音を立てていた。お肉の焼ける匂いはレトルト食品とは全く違う。その匂いは、ゆりを祖母がいた頃へと連れて行ってくれるような気がした。匂いの粒1つひとつが弾ける時に、懐かしさが飛び出してくるような気がした。目を閉じていれば、祖母が「おかえりい」と言って出てきてくれそうな気がする。

お母ちゃんが自分で料理を試してみようと思ったんだ。ゆりの分も1皿分として用意されている。夏子がゆりの分もおかずを用意してくれるということは、ゆりにも気配りをしてくれたということだ。ゆりは、自分の顔が綻んでいくのがよくわかった。自分がしなくても、ご飯が用意されているっていいな。料理をするには材料を切ったり、分量を量ったりと手間

がかかる。その手間を自分のためにかけてくれている人がここにいるということを、誰かに伝えたくてたまらなくなった。

ゆりは何も言わず、お肉が焼け、ピーマンが柔らかくなっていく音を感じていた。ストーブをつけなければ震えだしてしまうほど寒い日の台所なのに、そんなことも忘れてしまうほどだった。しばらくじっとしていたゆりは外が暗くなりかけているのに気づき、時計を見た。針は5時前を指している。

「2階の雨戸、閉めてくるね」

夏子に声をかけて、ゆりは2階に上がった。いつもと同じ階段をいつものように上ってきたはずだが、その足音は踊りのステップを踏んでいるようだった。西側の窓を開けると、冷たい風と一緒にピンク色の雲が飛びこんできた。ずっと向こうまで続く家々の存在感はなくなり、その向こうで黄金色の夕日が輝いている。夕日を囲むように浮かぶ雲は、ピンク色やオレンジ色に染まっている。

冬の空は輪郭がはっきりとして見えるが、夏と比べると変化が少ない。夏の空は変化に富んでいるから、人間はその変化に合わせて暮らしてきた。そこから知恵が生まれ、空色の変化、風の吹き方を感じて、空を読むことができるようになったんだろう。私だってそうになっていくんだ、とゆりは思った。

窓の外を見ると、さっきまで半分ほど顔を出していた夕日が、かすかに光の点を残して西の空に沈みかけている。ゆりは深呼吸をひとつして、夏子のいる台所へと向かった。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。